

連載 第24回 福聚山史

池浦 泰憲 文
及川 一晋 編

大正から昭和にかけて

6、日中戦争と柴田一能上人 戦時下における一仏教者の姿

常円寺第三十六世柴田一能上人が立正大学教授として、昭和十四年（一九三九）に、自らが所属する「東京帝国大学佛教青年会」が発行する『仏教思想講座』という書に「大乘佛教より見たる新民主主義」という論文を寄稿している。

昭和十二年（一九三七）七月の蘆溝橋事件を発端として、日中両部隊の衝突の戦火が中国大陸全土へと飛散して行った。昭和十四年十二月には、日本は蒋介石率いる国民政府を南へと追いやり、北京に中華民国臨時政府が成立していた。柴田上人は、この論文の中でこうした中国大陸での現況、いわゆる「北支事変」について、日本と戦火を交える蒋介石等の中心人物が、かつて日本に留学し、日本の文化や思想ではなく西洋文化や思想を学んだことによるものとし、「我々日本人 殊に佛徒として寔に申訳がないのである。大変な心得違いであったと忝底から懺悔しなければならぬと痛感するのである」と中国からの留学生に日本が西洋文化教育を施したことを反省する。そして、さらに「又我々自らもつい最近まで この事変の直前までといっていい 彼等支那留学生と同じ様な西洋思想を学

び同じ様な西洋文化の空気を吸って育って来たので、考へて見ると真にお恥ずかしい次第である」とまで述べる。

柴田一能上人は、第二十九世精進院日解上人の薫陶を受けながら、明治学院、慶応義塾に学び、福沢諭吉に認められ慶応の第一期留学生として明治三十四年（一九〇一）アメリカのキール大学に留学し、苦学の末マスター・オブ・アーツの学位を得る。明治後期において僧侶が留学するなどという事はほとんどなく、柴田上人は先駆的な留学僧として西洋学問、文化、思想を学んだ。西洋文化を肌で学び、帰国後もその経験を生かしながら広い視野をもつて宗門の近代化に尽力した。そのような人が、日中戦争という時局の中で、考へて見ると真にお恥ずかしい次第である」と語っているのである。

ところで、この論文の中で柴田上人は、中国であらたに提唱された「新民主主義」という思想を評価する。「新民主主義」は昭和十四年十二月に成立した中華民国臨時政府のもので唱えられたもので、この政府

を支える新民会などの組織が「新民主主義運動」として民衆の救済事業などを行っていた。

柴田上人は、この「新民主主義」について、これが民衆を導く指導者が自らを修養して人格者となり一般民衆を導いていくことを理想としており、「佛教で言へば此方が慈悲を以て迎へるなれば、必ずや民衆は心服して来るに違いない。所が自分を治めないで法律やサーベルの力でやらうとしても旨く行かない。これは廣く言へば東洋主義である。だから今日は東洋主義を復活させよう、西洋主義の法律萬能を止めて東洋主義の復活をやらうというのが新民主主義の着眼点である」と述べる。西洋主義が指導者が自らの修養をすることなく、武力や法律の力によって民衆を支配するといっているのである。これに比して「新民主主義」は「大乘佛教」に通じる慈悲を根本とする東洋主義とするのである。そして、中国本土のみならず当時世界各地で勃発している今回の「世界戦争（第二次世界大戦）の原因が、西洋



昭和5年9月14日、北米巡錫帰朝報告会での柴田一能上人於：八王子本立寺門前（『本立寺百科寺典』より転載）

の個人主義や利益を追求する功利主義にあるとし、この戦争によって、それらに基づいた人生観や世界観ではなく、慈悲に基づいた東洋主義に目覚めるといふ「現代西洋文化の決算」となるといふ。日本の中国での戦闘もその決算の一環で、自らも、大乘の見地に立った菩薩」として戦ふ、聖戦」と位置づける。

「新民主主義」をめぐることは、中華民国臨時政府が中国に進出した日本軍が傀儡政権であり、そこで唱えられた「新民主主義」は、日本軍の侵略を正当化するものでしかないという評価がある。終戦後、六十三年を経た現在でもなお、日中戦争の評価をめぐることは多くの意見があり単純に答えを出すことはできないが、少なくとも柴田上人のこの意見は、どんな大義であれ現実目の前で行われている「戦争」を即座に止めるものではなかった。そのような点から言えば、結果的に戦争眞實の役割を果たしたともいえる。また、当時日本が「戦時体制」という時局へ傾いていく中で、仏教者のみならず多くの宗教者が様々に思考し、その信義の「転向」を余儀なくされたことも事実である。柴田上人の西洋文化の否定も、そのような一環としてとらえることもできる。

しかし、所属する佛教青年会がそうであったように、柴田上人は様々に変転する現実的な状況に応じて、その中に仏教の根本思想を追求し、いかに現実社会に生かしていくことを目指していたことは間違いない。そこには多くの苦悩も想像でき、それは戦時下にリアルタイムに生きていた人にしかわからない仏教者の姿である。我々はそつした柴田上人の姿をどうとらえるかということを通じて、今生きている現代社会を考える示唆とするのである。

(つづく)